

## 新宮山彦ぐるーぷ



和歌山県

和歌山県新宮市で昭和49年に結成された会員数約50名の自然保護団体。紀伊半島を縦断する「大峯山脈」には、「大峯奥駈道」と呼ばれる修験の道があったが、明治維新後の神仏分離令・修験道廃止令により長期にわたって藪に閉ざされ荒廃化が進んでいた。こうした大峯奥駈道の惨状を目の当たりにし、その豊かな自然環境、文化的な景観を保護・保全し後世に伝えようと、昭和59年から32年にわたり、延べ1,600回以上環境整備に取り組んできた。

(推薦者：和歌山県)

世話人代表

川島 功

和歌山県新宮市に昭和49年（西暦1974年）4月「山を歩いて自然に親しみ、体験を通してモノを考えよう」という趣旨で「入会金、会費、会則無」で発足（世話人代表；玉岡憲明）。趣旨に賛同し行事に1回以上参加し、引続き参加意志のある人を会友として、今日まで42年間活動を継続して来ました。

昭和59年（1984年）から従来の登山一辺倒から、奥駈葉衣会を主宰した故前田勇一翁の遺志である「さびれた大峯・南奥駈の道をよみがえらせ、日本古来の精神文明を見直そう」に協賛し、藪に覆われ通行出来なかった南奥駈道（太古ノ辻～熊野・本宮大社≒45km）を刈拓き、安全安心して歩けるように水場と山小屋3棟（行仙宿・平治宿・持経宿）を皆さんに浄財を募り、新・改築して管理すると共に南奥駈道の環境保全・整備などが主な活動になっています。

昭和59年から平成28年迄、行事1,757回、延参加者≒18,500名が、環境整備活動に奉仕して下さいました。現在、東京から広島県方に会友が在り約60名在籍しています。尚、塩川正十郎先生は、入会を希望され名誉会長に推戴した（平成19年～平成27年）。

現在、会友の高齢化と共に新宮市周辺と若い会友が少ない課題もありますが、これまでの活動を継承し、世界遺産「南奥駈道」を後世に伝えるように、今後も精一杯努力する所存です。

これまでの「千日刈峰行」、行仙宿新築に伴う奮闘・苦勞話及び平成25年度からの行事活動記録は、新宮山彦ぐるーぷホームページ；<http://syamabico.web.fc2.com/>に掲載しています。

この度、厳正な審査で伝統と格式ある社会貢献者表彰の賞状を、内閣総理大臣夫人・安倍昭恵会長から授与され、功績者に名を連らねると共に広く認知・紹介され、

名誉あることと大変嬉しく受賞させて頂きました。

副賞の日本財団賞は、「創立40年の活動の歩み」発刊費用及び役ノ行者尊像の修復に伴う来春の開眼供養に充当出来、本当に有難かった。

これまでの一步一步の地道な奉仕活動の積み重ねが評価されたものであり、汗水を流された先輩諸兄のお陰と感謝し御礼を述べる共に喜びを分かち合う会費制報告会を開催し、地方紙に受賞紹介記事が掲載されました。この受賞を励みに活動を継続・継承してゆきます。今後とも、活動へのご指導ご支援を賜りますようお願い致します。

世話人代表 川島 功



▲奥駈道修復作業



▲修験者の接待



▲台風後の倒木処理



▲大峯奥駈道からの雲海



▲第1回道づくり



▲第1回道拓中



▲行仙宿建設前の敷地造成



▲奥駈道修復作業

## 鈴木 都



兵庫県

長女がダウン症として誕生したことが、その後の人生を賭けた事業に打ち込むキッカケとなった。1971年から夫の仕事で5年間、家族でアメリカで生活することとなり、日本とアメリカの障がいをもつ子どもに対する人々のまなざし、関わり方、取り組みの違いに目を開かれた思いになり、福祉の原点を学んだ。帰国後、神戸市垂水区に1983年、作業所「ホーム塩屋」を開設。(2002年に社会福祉法人となる。)その後、1993年に小規模作業所「くがの家」、2001年に小規模作業所「フレンズたるみ」を次々と開設し、知的障がい者が働くことや、自立への道を手探りで進めていく。作業所の活動を通して、利用者の老後をサポートするグループホームを2003年にグループホーム「もも」(5人入所)、2013年にグループホーム「風韻」(6人入所)、2014年にグループホーム「風花」(5人入所)をそれぞれ開設し現在16人が生活している。また、知的障がい者の芸術活動にも力を注ぎ、1989年に音楽グループ「コスモス」を結成し、毎年各地で公演している。1996年カナダの人形劇団「フェイマス・ピープル・プレイヤーズ (FPP)」を日本に招き、FPP日本代表として以後10年にわたり全国での公演を実現させたことで知的障がい者へのイメージを変え社会啓発に貢献し、各メディアで紹介されて多くの人々に障がい者の姿を再認識させるとともに、いくつかの自治体では障がい者がプロとして芸術活動を行うきっかけ作りとなった。この公演の収益で1997年に「可能性の芸術協会」を設立し、障がい者の芸術活動を支援、アーティストを輩出している。

(推薦者：橋本 明)

この度は名誉ある賞を賜り誠にありがとうございました。

当日各方面で素晴らしい活動をされている方々と一緒に受賞いただき感激いたしました。

私は、娘がダウン症として生まれてきたことがきっかけで福祉に携わってきました。

娘が生まれた50年前の日本は、今と比べようもないほどで偏見に満ちていました。障がいは「うつる」と信じている人もいました。さらに知的障がい者は何も出来ないと思われていた時代に、娘はいろんなものに興味を示し、自ら挑戦し、あきらめることもなく最後までやり遂げる根気がありました。音楽、スキー、水泳などいろんなことを楽しみながら成長しました。障がい者は何も出来ないと思われていた常識を打ち破りました。そして娘は音楽グループを結成し、「可能性の芸術」協会を設立のきっかけとなりました。このことは5年間のアメリカ生活で娘が受けた「良いところを伸ばして褒めて育てる」教育に大きな影響を受けました。

私は娘から多くのことを学びました。障がい者には一人一人に隠れた才能があると私は確信しました。いろんな体験を通し個性を引き出し、人として充実した人生を送るよう環境を整えることが私の使命となりました。

そして親の願いである自立した生活を送る目的のグループホームは、平成15年に実現し現在3カ所で作業26名のうち16名の方が親から離れて自立した生活を送っております。

長年の私の夢は実現し、私の役目は終わりました。ところが娘は親の私より早く老化が始まり、その現実には戸惑うばかりです。

この賞を励みに今後も障がい者側に寄り添って歩んでゆきたいと思います。

私を支えて下さいました大勢の方々に感謝の気持ちと財団のますますのご発展を心よりお祈りいたします。

鈴木 都



▲「さをり織り」をしています



▲「クッキー工房」にてクッキー生地を混ぜています



▲「フレンズ」で昼食作り



▲「ギャラリーミウラ」の展示室には利用者が描いた絵の展示スペース



▲「コスモス」の衣装は鈴木さんの手作り



▲神戸北野坂の「ギャラリーミウラ」で年に一度のさをり織りの商品を販売しています



▲「クラフト」工房の利用者の皆さん



▲「くがの家」で利用者がウェイトレスとなり、お客様にコーヒーや紅茶を提供しています



▲音楽グループ「コスモス」演奏中。カナダで2回演奏しました



▲「くがの家」の外観

## 矢満田 篤二



愛知県

愛知県児童相談所の児童福祉司として着任した昭和57年から「予期しない妊娠出産で育てられない赤ちゃんにも家庭が必要」との信念で、「産院から乳児院などへの直送状態は社会的養育放棄だ」と児童相談所長などの危惧や反対を説得して、赤ちゃんを産院から直接、養子縁組を前提で養父母へ託した「赤ちゃん縁組」は、その後、県内の全児童相談所の「愛知方式」として定着し、平成23年、厚生労働省は、愛知県の「新生児里親委託の実例」を全国に通知し、福岡市、兵庫県など各地に広がりを見せている。

卑小な我が身は別として、素晴らしい社会貢献をされている全国の皆さまのご活躍を知る機会を与えてくださった主催財団に、心から厚くお礼を申し上げます。

中でも、ミャンマーの国内平和に尽力されている井本勝幸様に初めてお会いして感動しました。井本様は、対立している軍事政権側と少数民族自衛勢力側の双方から信頼を受けて活動しておられ、さらに、この地に眠る第二次世界大戦の無謀な作戦による多くの戦没者たちの遺骨を収集して故国への帰還促進にも献身されていて、日本政府・厚生労働省からも信頼されている方です。早速、購入したご高著『ビルマのゼロファイター』を一気に読み終えて感動しました。将来のノーベル平和賞候補者を予感しました。

それに比べれば、私などが細々として行ってきた、「愛知方式・赤ちゃん縁組」など、とても比較にもなりません。ご指示に従い、概要を説明いたします。

私は愛知県職員として、昭和57年4月、児童相談所の児童福祉司に着任して、初めて乳児院を訪問したときの衝撃が記憶に鮮明です。若年レイプ被害、結婚詐欺などによる出産で、生みの母親が育てられないため収容・保護された乳幼児さんたちが、相手かまわず、必死に愛情を求め続ける表情に衝撃を受けました。

そこで、国内で唯一、愛知県産婦人科医会が行っていた「赤ちゃん縁組無料相談」を知って教えを受け、それをモデルに児童相談所の業務に採り入れ、不妊治療に絶望していた夫婦に、養子縁組で赤ちゃんを託す、「新生児養子縁組・里親委託」を開始しました。

結婚しても待望の子に恵まれない夫婦が、産院で生みの母親の同意を得て、名付け親にもなり、生まれたばかりの赤ちゃんを初めて抱き上げて、涙を流す場面は感動的です。

同じく、産みの母親は、子どもを手放す罪の意識が養父母からの感謝でぬぐい去られ、暗かった表情は明るく変化します。特に、女子中・高生の妊娠ケースでは、娘の

将来を悩む両親に養子縁組候補夫妻の存在を伝えると、親子共に安堵感を示していました。

近年、私は子どもの虐待防止に取り組む名古屋のNPO団体に協力して、日本財団などから支援を受けて「赤ちゃん縁組伝達講習会」を開催し、参加した各地の児童相談所職員から、初めて赤ちゃん縁組に取り組んで成功した喜びの報告が届いています。



▲2009年3月森崎家の特別養子縁組赤ちゃん・長男の悠貴ちゃんを抱いて



▲2013年5月慈恵病院で、蓮田太二院長さん、田尻由貴子看護部長さんから、森崎家の二男・晴斗ちゃんを授かって



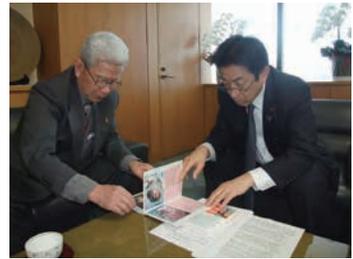
▲2013年5月慈恵病院・マリア館前で田尻由貴子・看護部長さんと共に。しかし、長男は、大むくれ。みんなの関心が「弟」に向けられ、赤ちゃん返り



▲2015年8月 森崎家の体験説明 名古屋・CAPNA 主催「赤ちゃん縁組伝達講習会」



▲森崎家、親子4人の近影



▲2015年2月塩崎厚労相に光文社新書を贈呈し、アルバムで赤ちゃん縁組例を大臣室で説明



▲2016年2月茨城県・里親委託研修会で、僚友の萬屋育子さんと共に招かれて出講



▲2016年2月茨城県土浦市のNPO「Babyぼけっと」を萬屋さんと訪問、赤ちゃん縁組準備中の岡田卓子代表と面談



▲2016年6月NPO「Babyぼけっと」6周年総会 岡田代表が救わなかったならば、母子心中、嬰兒殺し、育児放棄などで小さな命が消される危険な状態であった

## 中川原町連合町内会



元会長  
藤井 一男

兵庫県

兵庫県洲本市で、20年前の阪神大震災で苦難を経験した聴覚障がい者の人たちが自ら立ち上がり「特別養護老人ホーム淡路ふくろうの郷」を開所。開所当時はもちろん以降も地元代表として応援、交流を重ねてきた。平成23年に淡路ふくろうの郷からほど近くにあり、70年近い歴史を持つ同市立中川原中学校が閉校されることとなり、中川原町連合町内会はプロジェクトチームを発足。校舎の再活用について検討をかさね、「淡路ふくろうの郷」との協働のもと、地域の福祉拠点作りの要望を同市に提出した結果、同24年に高齢者や障がい者、全ての世代の交流の場、助け合える地域づくりができるように願いの込められた「ふれあいセンター」が誕生した。同施設内では、交流スペースとなる「ふれあい広場桜ヶ丘」だけではなく、地域の困りごとは地域で支え解決していく有償ボランティア活動である「おたがいさま中川原」活動を町内会が主となって行い、ふくろうの郷がサポートしている。またそれ以外にも聴覚障がい者・地域住民の生活を支えていく4つの事業を展開している。

(推薦者：及川 リウ子)

このたびは、貴重な社会貢献者表彰を頂戴し、誠にありがとうございます。

洲本市中川原地域には2つの特別養護老人ホームがあります。その一つ「特別養護老人ホーム淡路ふくろうの郷」は20年前の阪神大震災で苦難を経験した聴覚障がい者の人たちが自ら立ち上がり平成18年に開所させた施設であり、中川原町連合町内会としても開所当時はもちろん、以降も地元代表として応援・交流を重ねてきました。

その繋がりもあり、70年近い歴史を持つ中川原中学校閉校後の跡地活用に関して淡路ふくろうの郷をパートナーに迎え、「高齢者、障がい者、すべての世代の交流の場、助け合える地域づくり」を目指した中川原高齢者・障がい者地域ふれあいセンターを平成24年7月に開所させました。

同施設内では世代・障がいの有無を超えた交流を図るスペースである「ふれあい広場桜ヶ丘」、地域の困りごとは地域で支え問題を解決・軽減していく「おたがいさま中川原」を展開、特におたがいさま中川原では「家の片づけができない。」「重いものを持ってないから粗大ごみを捨てることができない。」「足が悪くて庭の手入れができない。」などの地域の困りごとを1時間700円で受け付け、年間130件近くの活動を行っており「地域にとってなくてはならない存在」となっています。

平成24年7月からスタートしたこの活動、今回社会貢献者表彰を賜ったことで我々の選んだ道は間違いではなかったことを再確認できました。地域福祉が叫ばれる中、今後も地域のことは地域で支え我々が生まれ育ったこの地域が他の地域のモデルとなるよう、より一層精進してまいります。今後ご支援、ご協力をいただければ幸いです。

元会長 藤井 一男



▲ふれあいセンター開所式



▲開所式には地域住民、聴覚障害者、行政など200名近くが出席



▲老若男女、障害の有無に関係のない交流を（夏祭り）



▲ふれあいセンター慰労会



▲「おたがいさま中川原」活動風景



▲「おたがいさま中川原」活動風景

## 聖明福祉協会・盲大学生奨学金事業



理事長  
本間 昭雄

東京都

東京都青梅市で盲老人福祉施設「社会福祉法人聖明福祉協会」を運営する本間昭雄氏が昭和44年に盲大学生のために創設した日本で唯一の盲大学生のための育英資金制度。本間氏は自らが20歳で失明し、十分に勉強できなかったことで、同じ悩み、苦しみをもった人たちが大学へ通い、将来活躍できる人に育ってほしいと制度を設けた。これまでに207名の盲学生に奨学金を貸与してきた。今年で48年目を迎える。

(推薦者：酒井 久江)

### 感謝の思いを込めて

本法人は昭和30年1月に視覚障害者の福祉を目的として、創設いたしました。

当初は在宅支援を中心に点字指導や社会復帰の相談事業が中心でした。昭和39年に高齢化の未来を見据え、盲老人のための入所施設を設置し、現在は3つの施設に280人の高齢視覚障害者及び認知症など重度の方々のための施設を経営しております。

昭和44年に創立15年を記念して、若い視覚障害者に「夢と希望の灯をともし」として、わが国唯一の「盲大学生奨学金貸与制度」を創設しました。毎年5名前後の盲大学生を奨学生として採用し、平成28年度までに207名の盲大学生に奨学金を貸与して参りました。

この事業には、公的な助成金は全くありません。当初から朝日新聞厚生文化事業団をはじめ、ご理解ある団体、個人や遺言による尊いご寄付によってまかなわれております。

盲大学生は、勉強のために晴眼の学生に比べ、機器の購入や点字図書の購入などより多くの経済的負担があります。

奨学金を受けた内の約200名の人々は、すでに社会の第一線で活躍しております。

全盲の弁護士が誕生しました。彼は司法試験に挑戦して9年目に合格したのです。その他、大学の教授等12名を数え、このうち半数は博士課程を修了しております。しかも、盲聾という二重障害の重度でありながら現在東京大学の教授として活躍している人もおります。さらに、内閣府に設けられた我が国の障害者施策を検討する委員会の委員として活躍している人、その他公務員、一般企業、教育、福祉など幅広い分野で活躍しております。

しかし、大学を卒業しても就職は厳しいものがあります。同時に返済出来ない人々

もいることは心の痛むことです。

この事業が誕生して48年間続いておりますが、これが評価され、貴財団の社会貢献者として表彰を受けることが出来たことは大変嬉しいことであります。と同時に、人づくりにいささかなりとも貢献することが出来たのかと誇らしく思うものであります。この表彰を受けて、盲大学生のための奨学金事業が広く知られることを期待しているものであります。

理事長 本間 昭雄



▲昭和47年5月30日 第4回貸与式で挨拶する本間昭雄現理事長（於朝日新聞社東京本社）



▲昭和57年7月10日 第14回貸与式とあわせて開催した福祉講演会。講師は曾野綾子氏。（於主婦会館）



▲昭和63年6月11日 第20回貸与式と「盲大学生を励ます会」を開催。「盲学生の今と昔」と題し、シンポジウムを行う。（於安田生命ホール）



▲昭和59年6月30日 発足15周年記念式典と貸与式を開催。歌手の竜鉄也さんと盲老人の共演を地域の視覚障害者や地元の老人クラブ会員を招待。（於聖明園寿荘ホール）



▲平成10年7月4日 第30回貸与式開催。本間理事長の挨拶。地域の方々も大勢参加。（於聖明福祉協会聖翻ホール）



▲平成27年7月4日第47回貸与式を開催。毎年、厚生労働省地域推進室長や社会で活躍の卒業生を招待し新奨学生と懇談会を行う。本間理事長の激励の挨拶。（於ホテルグランドヒル市ヶ谷）

## 社会福祉法人 温友会 いずみ通所センター



常務理事

松若 貞二

大阪府

大阪府高石市で昭和53年から松若和子さんが自宅を開放して障がいのある人のための授産施設を開設し、同59年に認可された。現在80名の園生が送迎バスにより通所し、10社以上の企業から受注した製品の袋づめや箱の組み立てなどの仕事に励む。また保護者の相談に乗ったり、野外活動や旅行会も行うなど、障がいを持っている人たちが人権を尊重され、ひとりの人間として住み慣れた場所であたりまえの生活を送ることができるよう「生きがいと夢が持てるような生活」の実現を目標に活動している。

(推薦者：石川 周子)

第47回社会貢献者表彰の榮譽に浴し、理事長、役員、関係者一同、心から喜び身に余る光栄と思っています。

受賞式には私と推薦者と共に身の引き締まる思いで参列させて頂きましたが、安倍会長、内館選考委員長、笹川日本財団会長の温かいお言葉を感慨深く拝聴させていただき、これから先も社会貢献活動を継続していく意義を改めて認識いたしました。

当施設は昭和53年に現理事長宅の一角に知的な障がいを持つ人たちの無認可作業所として発足し、昭和59年に理事長所有の遊休不動産を寄贈し、社会福祉法人の認可を受け設立されました。創設38年になります。開所する迄は今の様な知的障がい者への認知度も低く偏見のある時代であったため、理解を得ることが難しく、何度も地域住民との対話を重ね設立された施設であります。その後、創設来の理念である障がいを持っている人たちが人権を尊重され、ひとりの人間として住み慣れた場所であたりまえの生活を送ることができるよう「生きがいと夢を持てるような生活」の実現を目標に活動してきました。自宅以外の第二の居場所づくりを目指してきました。しかしながら、昨今の度重なる障がい福祉制度の変遷の中で施設の経営事態も大きく変貌し利用者の経済的自立も問われることとなってきました。そんな中、10月28日の産経新聞の正論の中で笹川陽平会長が掲載された就労継続支援B型の利用者工賃の記事は今、当施設の喫緊の課題といえます。就職が不可能な障がい者の工賃をどう引上げていくか？ 記述通り我々施設の意識改革が求められていると痛感いたしました。縁あって今回の受賞懇親会で大分県別府市の社会福祉法人太陽の家様と同じテーブルをご配慮いただきお話を聞く中、是非訪問したいと思っております。

この様な機会を作ってくれたのも私にとっては大きな収穫であったと思っています。又、当施設以外の50の個人、法人のご紹介を受け、様々な社会貢献の取り組みを

されていることを知り、今まさに社会福祉法人が直面している地域における公益的な取り組みへのヒントを頂戴した有意義な受賞式となりました。

最後に社会貢献支援財団の役員様、職員の皆様には心細やかなご配慮をいただき心よりお礼申し上げます。

常務理事 松若 貞二



## 生田 武志



大阪府

人口密度、ドヤ（簡易宿泊所）の数、結核の罹患率、救急車の出動回数などで日本一、また日雇い労働者、野宿者の人数と日本で最も多い大阪市西成区の釜ヶ崎（別称「あいりん地区」）に大学時代から関わり、「どんな悲惨な状況でも、人には尊厳がある」と、卒業後はこの街で自ら日雇い労働をしながら野宿者を中心に夜回りによる声掛け、生活保護受給者の同行申請、市と交渉、仕事や病気の相談、電話相談など、30年間にわたり支援活動を続けている。

このたび、社会貢献者表彰を頂き、感謝申し上げます。

大学生だった1986年4月に釜ヶ崎に初めて行き、0.62平方キロの街に500人ほどの人たちが失業のために野宿になり、さらに多くの人たちが病死、凍死、餓死していく様子を見てショックを受けました。それから野宿者支援活動、日雇労働運動、そして（山王こどもセンターなど）こどもたちに関わる活動などに関わってきました。また、10代の若者などが野宿者を襲い、ときに殺害する事件が後をたたないことから、2000年から全国各地の小中高校で「野宿問題の授業」を続けています。

現在、野宿者ネットワークを中心に野宿者支援活動を行なっています。野宿者ネットワークは年間予算100万円そこそこの団体（人件費ゼロ）ですが、最大の経費が「寝袋代」です。以前は夜まわりで冬季に100個は配っており、近年も数十個配っています。夏用寝袋では冬の野宿には役に立たないので、定価5,000円ぐらいのものを毎年買っています。また、野宿者ネットワークが在庫に置いている寝袋は、2011年の東日本大震災のときは仙台の夜まわり団体に、今年の熊本地震のときは熊本の支援団体にそれぞれありったけの数十個、郵送しました。どちらもまだ寒い時期の被災だったので、車中泊の人や野宿の人たちのために使ってもらえたようです。副賞はこの寝袋代などに使っています。

11月の授賞式では、以前に講演に呼んでいただいた「反貧困ネットワーク広島」、2011年に泊まり込みでボランティアに行った「仙台ワンファミリー」の人たちも受賞で来ておられ、いろいろお話ししました。また、神戸の女性シェルターネットの方や、沖縄で夜間中学を運営されている方、大阪で生活困窮者レスキュー事業に関わっておられる方もおられ、いろいろな情報交換でき、たいへん有意義な機会になりました。

いま、釜ヶ崎では仕事がなくなり、行政の窓口が閉じる年末年始を迎え、「一人の餓死・凍死者も出さな！」を合言葉とする越冬闘争が始まろうとしています。大晦日

に夜まわりを行ない、元日は西成公園で野宿している人たちとの食事会を行ないます。厳しい状況が続く中、今後もできる限りの活動を続けていきたいと思っています。



▲ネコと大植さん



▲西成公園光景



▲布団敷き



▲夜回り



▲野宿当事者との授業



## 社会福祉法人 アンサンブル会



長野県

自身の娘が生来性の知的障がい者であったことを契機に、障がい者の支援事業を始めて15年。知的障がいのある人たちの有意義な社会参加と自立を目標に、4ヵ所の日中活動の場と15棟のグループホームを運営。110名の職員が昼夜にわたる一貫した支援を行うことにより、町の中、市民社会の中で障がいのある人たちが人生を送ることを実現。独創的な仕事を作り出しながら、障がい者の経済的な自立も同時に達成し、「親亡き後」という保護者の最大の悩みに終止符を打つ。

理事・アンサンブル松川施設長

小椋 雅子

「社会貢献者表彰」の存在も知らなかった私たちが、思いがけず表彰して頂き、周囲の方々からもとても喜んでいただきました。

私たち夫婦が知的障害のある我が子のために、養護学校高等部を卒業してからの生きる場所を作りたいと最初に活動を始めたのは平成7年の夏でしたが、その後、平成9年11月に「卒業後の働く場に」と喫茶店を開きました。しかし「福祉臭かった」のかお客さんは少なく、運営は厳しく、卒業後の職場として自立は難しいと思いました。そこで平成11年4月、その場所を長野県から共同作業所として認めて頂き、運営費を得て卒業してきた子供たちの居場所としました。

障害のある人たちにしっかりした支援をするには、職員体制がきちんとしていなければなりません。それには経営がきちんと成り立たなければなりません。そこで平成13年11月「社会福祉法人アンサンブル会」を死に物狂いで立ち上げました。平成14年4月「知的障害者通所授産施設アンサンブル松川」と「グループホーム」を同時にスタートさせ、農業とクッキー作りを仕事とし、グループホームで生活し、自らの給料と障害基礎年金で経済的にも自立していくことを基本に据えました。長野県下伊那郡松川町からスタートしたアンサンブル会は3年後に長野県伊那市にも広がり、現在、日中の通所施設が4ヵ所、グループホームが15棟となりました。利用している知的障害の人は160名を超えました。生産品の売上は1億円を超え、新たに発明したヒノキ畳（10月に特許認証）で中国に進出します。＜障害を負って生まれてきても町の中で幸せな人生を生きる＞。全員が家庭からの金銭援助なしで生活しています。＜障害があっても同じ年頃の人たちと遜色ない人生を＞。職員は福祉の枠に自らを縛らず、自由な発想で仕事を作り出し、利用者は独創的でやり甲斐のある仕事をしながら、仲間とともに楽しい人生を送る。もうアンサンブルには「親亡き後」の心配はありません。

アンサンブルに集う障害のある人たちは、これからも地に足の着いた生活を自らの力で続けていきます。

全国に人知れず他者のために創造的苦闘をしている方々がたくさんいることを、今回知ることができました。それは大きな感動でした。

「涙とともにパンを食べたものでなければ 人生の味はわからない」ことを現代に告知するこの賞に選んでいただいたことを光榮に思います。

理事・アンサンブル松川施設長 小椋 雅子



▲木工班：木工製品製造の様子



▲アウトドア班：薪づくりの様子



▲ランチ班：調理の様子



▲農業班：農作業の様子



▲イベント：利用者忘年会



▲スイーツ班：菓子製造の様子

## さいもんめ



代表  
上坂 崇人

京都府

昭和38年に設立され、今年53年目となる大学のボランティアサークル。当初は京都大学の学生が自転車で京都の寺院等をサイクリング旅行する活動をしていたが、メンバーから「福祉」「ボランティア活動」をしたいという意見があり、同市内の児童福祉施設を自転車で回り活動を行うという形へと変化していった。現在は、主に京都大学・京都女子大学・立命館大学等の大学生約150名が所属し活動しており、京都市内の母子生活支援施設にて、児童に遊びの場の提供や学習支援等の活動を提供している。「さいもんめ」が活動している母子生活支援施設には両親のDV問題や、児童虐待等の理由により、抑圧された生活を余儀なくされた子どもたちが多く入所している。毎週定期的に施設に來所し、遊びや学習支援の活動を通じて、子どもたちが安心して関わる事の出来る相談相手となり、心のケアにおいて欠かせない存在となっている。また、入所児童だけでなく、退所し地域で生活する子どもたちや、地域のひとり親家庭の子どもたちにも、学習支援等において関わりを持ち、季節のイベントなども行い子どもたちに寄りそい、頼れる存在として活動している。  
(推薦者：京都母子生活支援施設協議会 会長 芹澤 出)

この度は社会貢献者表彰という栄えある表彰を賜り大変光栄に思います。これまで活動を続けてこられたさいもんめの先代の方々、活動を支えていただいている推薦人でもある京都母子生活支援施設の職員の方々のおかげと感謝しております。

さいもんめは50年以上前から活動を続けてきた児童福祉ボランティアサークルです。現在は150名ほどの大学生が所属しています。4つの母子生活支援施設に分かれ、それぞれ週1回または2回、毎回2時間ほど子供たちと一緒に遊ぶ活動をしています。巨大すごろく、毛糸で工作、風船バレーなど多種多様な遊びを用意して子供たちに楽しんでもらっています。さらに、七夕やクリスマスなどの季節の行事には特別なイベントを企画しています。毎年夏に行っている2泊3日のキャンプでは子供たちの元気に楽しむ姿が見られ、学生も力を入れて準備をしています。普段の活動ではできない多くの事を子供たちに体験してもらい、成長し、楽しんでもらうために、4ヵ月以上かけてキャンプの企画、準備をしています。自分たちでご飯を作ったり、他の子供たちみんなと協力してキャンプファイアーを楽しんだりといった経験は貴重なものであると考えています。

母子生活支援施設の子供たちは様々な事情を抱えてお母さんと一緒にそこで暮らしています。遊びの活動の時には、子供たちのほとんどが普通の子供と何ら変わらない元気な様子で遊んでいます。しかし、私たち学生は子供たちが様々な事情を抱えていることをしっかりと考慮して活動をするように気を付けています。特に、子供たちの安全や人間関係に気を配る事などを心がけています。そのためにもルールを設け、そしてそれをしっかりと守ってもらうようにしています。毎日の活動の後には反省会を開き、子供たちとの関わり方に関する意見交換を行っています。施設の職員の方々にも御助言をいただき、子供たちにより良い活動ができるように励んでいます。子供たちの安全、成長、そして楽しみを目標としてさいもんめの学生一同これからも努力し

ていきます。

今回の受賞は大変光栄であるとともに、私たちにとってこれからも子供たちのために活動を続けていく大きな励みとなります。ほかの受賞者様の活動について知る機会が得られたことも大変貴重でした。この度は社会貢献者表彰を賜り誠にありがとうございました。

代表 上坂 崇人

写真はこどもたちとのキャンプのための予行演習の様子



▲ 衛生、救急用品の整理



▲ 食事風景



▲ 学生全員で集合写真



▲ ゲームの予行演習



▲ かまどでの調理風景



▲ 工作（自然物を使ったロボット製作）の予行演習

## 一般社団法人 日本聴導犬推進協会



埼玉県

2000年3月に日本で初めて「聴導犬」を導入した日本小動物獣医師会から独立し、聴導犬の育成と普及を目的に設立された組織。聴導犬とは聴覚障がい者の生活を安全で安心できるものにするために、生活で必要な音を聴覚障がい者にタッチして知らせ音源に導く身体障害者補助犬で、盲導犬に遅れること約150年、1975年アメリカで一人の聴覚障がい者が自分の犬を音に反応するようドクトレーナーに訓練してもらったことから始まった。2017年1月現在は日本国内聴導犬の実働数67頭、盲導犬と比べると圧倒的に少ない。聴導犬希望者は1万人以上いると推測されている。聴導犬の存在を多くの人に知ってもらうため、年間120件以上のイベントを行い普及活動を行っている。

(推薦者：熊谷 秀之)

常任理事

水越 みゆき

この度は、社会貢献者表彰の栄に浴し、心より感謝を申し上げます。長年の地道な活動が評価され受賞できたことを、大変嬉しく思っております。

私たちの団体は、聴導犬と言われる耳の聞こえない方、聞こえにくい方の自立と社会参加の手助けをする身体障害者補助犬の育成と普及活動を行っております。盲導犬や介助犬に比べ、まだまだ認知度は低く社会での受け入れや支援が進んでいないのが現状です。

聴導犬は、日常生活で発生する音からもたらされる情報を聞こえない方に知らせ、安心して安全な生活ができるようにしてくれます。例えば、インターフォン・目覚まし時計・火災報知器・後ろから来る自転車や車の音、ユーザーさんを呼ぶ声など、音源を探し使用者に伝え、音源に誘導する等の方法で情報を伝えます。聞こえる私たちが当たり前聞いて判断し行動するように、聞こえない方も聴導犬のサポートを受けながら判断し行動できるようにしてくれているのです。

また、聴導犬と書かれたケープを身に着けていることで、耳の聞こえない方であること目印としての役割も果たしてくれています。適切な方法で必要な情報が周囲からもたらされることで、社会参加しやすい状況を作り出してくれているのです。

今回の受賞式では、受賞者代表挨拶の大役を務めさせていただくと共に、聴導犬のお仕事を紹介するデモンストレーションを行う機会をいただきました。いつもとは違う状況下で、少々緊張し上手く伝えられたか心配な面もありますが、少しでも聴導犬のことを印象付けることができたのなら、成功したと言えるのではないかと考えております。

現在、日本全国に聴導犬は64頭しか活躍しておりません。私たちはこれからも、良質な聴導犬を育成すると共に、聞こえない方が聴導犬と共に安心して社会参加することができるように、人と動物が共生できる社会を目指して、聴導犬の普及活動を続けていきたいと思っております。

聴導犬が日本で育成されるようになってから33年。小さな種が少しずつ成長し、様々な方々の目に留まるほどには、育成も普及も進んできました。団体としても法人

格を変えるなど飛躍のための転換期に入っています。今回の受賞も一つのスタートと捉え、発展できるように進んでいきたいと思えます。

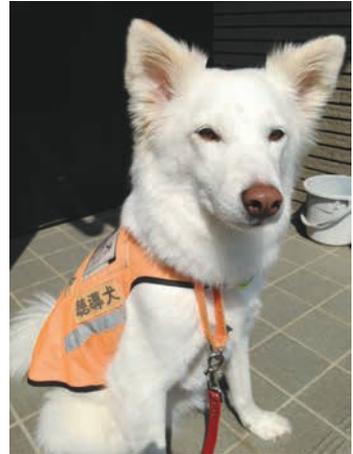
常任理事 水越みゆき



▲電車に乗る訓練中 座席の下で待ちます



▲乗車訓練中



▲活躍中の聴導犬



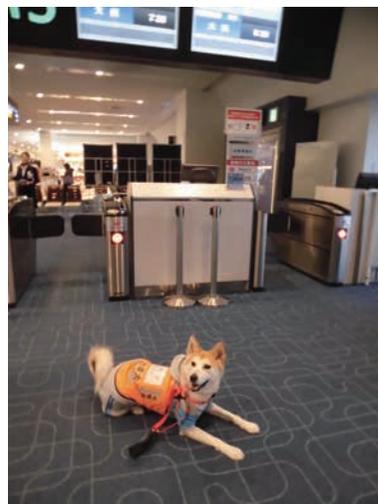
▲スカイツリーのオープニングセレモニーに参加しました



▲聴導犬の活動を知ってもらうため各地でイベントに参加しています



▲空港で訓練中



▲飛行機に乗る訓練をします